

日本の名作名文ハイライト

# 芋粥

芥川龍之介

朗読 甲斐卓雄

出所 声の花束 (こえたば)

<http://www.koetaba.net/3book/index.html>

teabreak 編

# 芋粥 芥川龍之介

## ●冒頭部分

元慶の末か、仁和の始にあつた話であろう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めていない。読者はただ、平安朝という、遠い昔が背景になっているという事を、知ってさえいてくれれば、よいのである。——その頃、摂政藤原「基経に仕えている侍の中に、某という五位があつた。

これも、某と書かずに、何の誰と、ちゃんと姓名を明にしたいのであるが、生憎旧記には、それが伝わっていない。恐らくは、実際、伝わる資格がない程、平凡な男だったのであろう。一体旧記の著者などという者は、平凡な人間や話に、余り興味を持たなかつたらしい。この点で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがう。王朝時代の小説家は、存外、閑人でない。——とにかく、摂政藤原基経に仕えている侍の中に、某という五位があつた。これが、この話の主人公である。

五位は、風采の甚揚らない男であつた。第一背が低い。それから赤鼻で、眼尻が下っている。口髭はもちろん薄い。頬が、こけているから、頤が、人並はずれて、細く見える。唇は——一々、数へ立てていけば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、でき上っていたのである。

この男が、何時、どうして、基経に仕えるようになったのか、それは誰も知っていない。が、よほど以前から、同じような色の退めた水干に、同じような

萎々した烏帽子をかけて、同じような役目を、飽きずに、毎日、繰返している事だけは、確である。その結果であろう、今では、誰が見ても、この男に若い時があったとは思われない。五位は四十を越していた。)その代り、生れた時から、あの通り寒むそうな赤鼻と、形ばかりの口髭とを、朱雀大路の衢風に、吹かせていたという気がする。上は主人の基経から、下は牛飼の童児まで、無意識ながら、悉そう信じて疑う者がない。

こういう風采を具えた男が、周囲から受ける待遇は、恐らく書くまでもないことであろう。侍所にいる連中は、五位に対して、ほとんど蠅程の注意も払わない。有位無位、併せて二十人に近い下役さへ彼の出入りには、不思議な位、冷淡を極めている。五位が何かいいつけても、決して彼等同志の雑談をやめた事はない。彼等にとっては、空気存在が見えないように、五位の存在も、眼を遮らないのであろう。下役でさえそうだとすれば、別当とか、侍所の司とかいう上役たちが頭から彼を相手にしないのは、むしろ自然の数である。彼等は、五位に対すると、ほとんど、子供らしい無意味な悪意を、冷然とした表情の後に隠して、何をいうのでも、手真似だけで用を足した。人間に、言語があるのは、偶然ではない。従って、彼等も手真似では用を弁じない事が、時々ある。が、彼等は、それを全然五位の悟性に、欠陥があるからだ、思っているらしい。そこで彼等は用が足りないと、この男の歪んだ揉烏帽子の先から、切れかけた藁草履の尻まで、万遍なく見上げたり、見下したりして、それから、鼻で哂ひながら、急に後を向いてしまう。それでも、五位は、腹を立てた事がな

い。彼は一切の不正を、不正として感じない程、意気地のない、憶病な人間だったのである。

所が、同僚の侍たちになると、進んで、彼を翻弄しようとした。年かさの同僚が、彼れの振わない風来を材料にして、古いしやれを聞かせようとするごとく、年下の同僚も、またそれを機会にして、いわゆる興言利口の練習をしようとしたからである。彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを、品騰して飽きる事を知らなかった。そればかりではない。彼が五六年前に別れたうけ唇の女房と、その女房と関係があったという酒のみの法師とも、しばしば彼等の話題になった。

その上、どうかすると、彼等は甚、性質の悪い悪戯さえする。それを今一々、列記する事はできない。が、彼の篠枝の酒を飲んで、後へ尿を入れて置いたという事を書けば、その外は凡、想像される事だろうと思う。

しかし、五位はこれらの揶揄に対して、全然無感覚であった。少くもわき眼には、無感覚であるらしく思われた。彼は何をいわれても、顔の色さえ変えた事がない。黙って例の薄い口髭を撫でながら、するだけの事をしてすましていく。ただ、同僚の悪戯が、高じすぎて、鬚に紙切れをつけたり、太刀の鞘に草履を結びつけたりとすると、彼は笑うのか、泣くのか、わからないような笑顔をして、「いけぬのう、お身たちは。」という。その顔を見、その声を聞いた者は、誰でも一時あるいぢらしさに打たれてしまう。彼等にいじめられるのは、

一人、この赤鼻の五位だけではない、彼等の知らない誰かが——多数の誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めている。————そういう気が、臍げ

ながら、彼等の心に、一瞬の間、しみこんで来るからである。ただその時の心もちを、何時までも持続ける者は甚少い。その少い中の一人に、ある無位の侍があった。これは丹波の国から来た男で、まだ柔かい口髭が、やっとな鼻の下に、生えかかった位の青年である。もちろん、この男も始めは皆といっしよに、何の理由もなく、赤鼻の五位を軽蔑した。所が、ある日何かの折に、「いけぬのう、お身たちは」という声を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以来、この男の眼にだけは、五位が全く別人として、映るようになった。栄養の不足した、血色の悪い、間のぬけた五位の顔にも、世間の迫害にべそを掻いた、「人間」が覗いているからである。この無位の侍には、五位の事を考える度に、世の中のすべてが急に本来の劣等さを露すように思われた。そうしてそれと同時に霜げた赤鼻と数える程の口髭とが何となく一味の慰安を自分の心に伝えてくれるように思われた。……

しかし、それは、ただこの男一人に、限った事である。こういう例外を除けば、五位は、依然として周囲の軽蔑の中に、犬のような生活を続けて行かなければならなかった。第一彼には着物らしい着物が一つもない。青鈍の水干と、同じ色の指貫とが一つずつあるのが、今ではそれが上白んで、藍とも紺とも、つかないような色に、なっている。水干はそれでも、肩が少し落ちて、丸組の緒や菊綴の色が怪しくなっているだけだが、指貫になると、裾のあたりのいたみ方が一通りでない。その指貫の中から、下の袴もはかない、細い足が出ているのを見ると、口の悪い同僚でなくとも、瘦公卿の車を牽いている、瘦牛の歩

みを見るような、みすばらしい心もちがする。それに佩いている太刀も、すこぶる覺束ない物で、柄の金具も如何はしければ、黒鞆の塗も剥げかかっている。これが例の赤鼻で、だらしなく草履をひきずりながら、ただでさえ猫背なのを、一層寒空の下に背ぐくまって、もの欲しそうに、左右を眺め眺め、きざみ足に歩くのだから、通りがかりの物売りまで莫迦にするのも、無理はない。現に、こういう事さえあった。……

ある日、五位が三条坊門を神泉苑の方へ行く所で、子供が六七人、路ばたに集って、何かしているのを見た事がある。「こまつぶり」でも、回しているのかと思って、後ろから覗いて見ると、何処かから迷って来た、尨犬の首へ繩をつけて、打ったり殴いたりしているのであった。憶病な五位は、これまで何かに同情を寄せる事があっても、あたりへ気を兼ねて、まだ一度もそれを行為に見わしたことがない。が、この時だけは相手が子供だったので、幾分か勇氣が出た。そこでできるだけ、笑顔をつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、堪忍してやりなされ。犬も打たれば、痛いでしょう」と声をかけた。すると、その子供ほうりかえりながら、上眼を使って、蔑すむように、ぢろぢろ五位の姿を見た。いわば侍所の別当が用の通じない時に、この男を見るような顔をして、見たのである。「いらぬ世話はやかれたうもない。」その子供は一足下りながら、高慢な唇を反らせて、こういった。「何じや、この鼻赤めが。」五位はこの語が自分の顔を打ったように感じた。が、それは悪態をつかれて、腹が立ったからでは毛頭ない。いわなくともいい事をいって、

恥をかいた自分が、情なくなつたからである。彼は、きまりが悪いのを苦しい笑顔に隠しながら、黙つて、また、神泉苑の方へ歩き出した。後では、子供が、六七人、肩を寄せて、「べつかつかう」をしたり、舌を出したりしている。もちろん彼はそんな事を知らない。知っていたにしても、それが、この意気地のない五位にとって、何であろう。……

では、この話の主人公は、ただ、軽蔑される為にのみ生れて来た人間で、別に何の希望も持っていないかというのと、そうでもない。五位は五六年前から芋粥という物に、異常な執着を持っている。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥の事をいうのである。当時はこれが、無上の佳味として、上は万乗の君の食膳にさへ、上せられた。従つて、我五位のごとき人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさへ、飲めるのは僅に喉を沾すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飲んで見たいという事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になつていた。もちろん、彼は、それを誰にも話した事がない。いや彼自身さえそれが、彼の一生を貫いている欲望だとは、明白に意識しなかつた事であろう。が事實は彼がその為に、生きていくといつても、差支ない程であつた。——人間は、時として、充されるか充されないか、わからない欲望の為に、一生を捧げてしまう。その愚を晒ふ者は、畢竟、人生に対する路傍の人に過ぎない。

しかし、五位が夢想していた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に事實となつて現れた。その始終を書こうというのが、芋粥の話の目的なのである。